

## この1年を振り返って

総合管理学部

大谷 瑛美

私は、留学前からこの留学中にやりたいと思っていたことが3つありました。

- ① インターンシップをすること
- ② ボランティア活動をすること
- ③ アメリカの文化やその他の国々の文化の理解を深めると共に、日本の文化をより多くの人に知ってもらう

①私は、インターンシップを後期である春学期から履修科目の一つとして取りました。

この履修システムは、一ヶ月に一度の頻度で担当の教授にレポートを提出することで単位取得が認められる仕組みとなっており、単位数はインターンに行った時間の長さによって分けられていて、私は2単位で週に2度行くことにしました。ビリングズは熊本と比べても企業数がかなり少ないため、看護科や体育かの学生が研修を受けるのを除いて、大学からインターンをする学生はあまり多くありません。10月頃から次学期から行くインターンシップ先を決めるためにキャリア・アドバイスセンターへと足を運び、履歴書の書き方や自己アピールの方法をアドバイザーから指導を受けました。私はもともと政治系のインターンをしたかったので、街に Denny Rehberg(共和党)という国会議員(Congressman)の事務所があるということを知り、そこに決めました。最初アドバイザーから、「じゃあ、あとは自分で向こうと連絡を取ってみて」と言われた時は、外国人である自分をすんなりと受け入れてくれるのかどうか不安に思いましたが、勇気を出して電話すると、こちらのやる気をちゃんと買ってくれたようで、数日後すぐにOKの返事をくれました。

一月から始まったインターンシップでは、主にファイリングや州民から寄せられた意見等をコンピューターへ入力する作業をしました。私がインターンをした国会議員事務所は、ワシントン DC にある一つとモンタナ州内にある五つある内の一つで、オフィサーは全部で五人でした。主に私のお世話をしてくださったシーラさんはとても親切で、いつも笑顔で接してくださいました。更に、私が春休みにワシントン DC に行く予定であることを伝えると、6ヶ月前に予約しないと入れないホワイトハウスに1ヶ月前であるにもかかわらず予約をとって下さり、他にも国会議事堂や最高裁判所、博物館などのツアーも全て予約していただきました。シーラさんのご好意、お気遣いには本当に感謝感謝でした。



このインターンシップを通して、銃取り締まりの問題などがあるアメリカ社会の事情とそれに対する市民の生の意見や、野生動物保護や保険料の問題などモンタナ州民が抱えている問題などを知ることができ、地元の新聞に書かれている事柄や前期に取っていた U.S. Government の授業から得る情報に加えた勉強をすることができました。

②私はボランティア活動に以前から興味があったので、前期は大学内のボランティアクラブに参加し、十月の Food Bank というホームレスの人々の為の食糧支援をする活動で、ハロウィーンの日に関わるとして食料集めるといった内容のボランティアをしました。一月は、冬休み期間を使ってドイツ人の友達がボランティアをしていた Women & Family Shelter というシングルマザーとその子どもたちの社会的自立を支援する施設で、子ども達の子守などのボランティアをしました。モンタナには、MRM (Montana Rescue Mission) というキリスト教系の団体によって運営されているこのような福祉施設がいくつかあり、全ては寄付金やこの団体が運営しているリサイクルショップの売上金によってまかなわれています。入所者のほとんどがネイティブアメリカンで、子ども達は明るくとても活発で、何にでも興味を示し、私のカメラが気に入った様で私から奪い取っては写真を何枚も撮ったりしていました。



最後に、五月の夏休みを利用して、動物愛護施設を視察する機会がありました。動物愛護団体に動物保護巡査官の方を紹介してもらい、巡回に一日同行させてもらいました。ビルングズ市内にはたくさんの動物保護施設や動物病院があり、その数には大変驚きました。ペットの飼い主への指導や取締りの現場を見学させると、杜撰な飼育状況が見えてきてショックでしたが、とてもいい勉強になったと思います。



③私は、一年間を通して国際交流を積極的にしようという目標をかかげました。十月のハロウィーンに 'Trick or Treat!' と言いながら家々を廻ったり、十一月の Thanksgiving に七面鳥を焼いたり、十二月のクリスマスにプレゼント交換をしたり、二月のイースターに卵を染めたりなど、様々なアメリカの文化を体験することができました。学校には International RA と呼ばれる、留学生のお世話をしてくれるサラという学生の他に、International Club という、部員が全て留学生で構成されているサークルがあり、一年中いろいろなイベントが目白押しでした。それらを通して他の留学生たちと親しくなることができ、毎日カフェテリアに集まってはいろいろな国の文化を教え合って意見交換をしたり、時には議論しあったりもしました。留学生は、中国・ドイツ・日本からの交換留学生のほかに、フランス・インド・韓国・セルビアなどの様々な国からの個人留学で来ている学生もいて、その中には二度も戦争に行った人や発展途上国で一年間ボランティア活動をしていた経験がある人もいて、話を聞いていると自分と同じくらいの年と思えないほどの経験をしていたりして、とても刺激を受けました。

四月にあった International Food Fair で、私はいけばなのデモンストレーションをしました。華道は、大学のサークルに入って始めたのでまだまだ初心者ですが、来場していた年配の女性が話しかけてきて、「私も以前名古屋に住んでいた時に、華道を習っていた」と言って、懐かしそうに見てくれたので、嬉しくなりました。この他にも、友達に折り紙の折り方を教えたり、Public Speaking のクラスで日本料理や文化などのプレゼンテーションをしたりなどしました。アメリカ人から見ると、日本やアジアの国々はまだまだ遠い場所と感じている印象を受けましたが、スーパーマーケットに置かれている食材や、道路を走っている車、テレビで放送されているアニメなどを見ると、アジア諸国への関心は高まっているように感じました。



一年間を通して、私がこの留学生生活を有意義なものにする為に必要だと感じた心構えは、『行動力』と『自覚』の二つです。私はもともと人の中心となって何かをしたり、自分をアピールするということが苦手ですが、「貴重な一年なのだから失敗を恐れずにやってみよう」と勇気を持ち、自分を奮い立たせていろいろな事に挑戦したことで、精神的にも強くなれたと思います。好奇心とやる気を持って行動すれば、みんなそれに応えて協力してくれます。行動には必然的に交換留学生としての責任、一人の日本人として見られるという責任も伴います。だから、常に人の迷惑になるような身勝手な振舞いは避け、自分は何をしにここへ来ているのかという自覚を持って行動するように気を配りました。

最後に、一年間遠くから支えてくれた家族や友人、お世話になった大学の関係者の方々、そして多くを教えてくださいましたアメリカで出会った方々に感謝し、この経験を今後に生かしたいです。